

伝えたい 由布のもの NO. 9



〈取材・文〉
岡田鹿乃子
Kanakoko
Okada

東京都出身。進学・就職を経て2020年8月に由布市の地域おこし協力隊に着任。移住定住担当として活動しています。由布市に移住して丸一年が経ちました。畑仕事、田植え、竹細工、山登り、釣り、お茶…自然をたっぷり味わっています。

● 問い合わせ

総合政策課

☎ 097-582-1158

由布で育った藍の葉で行う藍染め

今回の〈伝えたい由布のもの〉は移ろいを感じる由布のものです。挾間町鬼瀬にお住まいのあだちよしこさんの〈由布で育った藍の葉で行う藍染め〉を紹介します。

夏も本番。藍の葉から生まれる涼やかな藍染めは、夏にぴったりの色味です。そんな藍色を染めるには長い工程があり、古くから分業でないと難しいとされてきました。染料のもとである「すくも」を購入して藍染めする作家さんもある中、あだちさんは家の前の150坪の畑で、藍の葉を育てるところから藍の染料をつくり染めるところまで、藍染めの全てをこの地域で行う藍染め作家さんです。

4月は畑を耕し種をまき、7月は藍の葉を刈り取り乾燥させます。11月は何度も混ぜ合わせながら発酵させ染料のもとである「すくも」を作り、2月は「すくも」に灰汁や石灰を入れ、藍の染料を完成させます。ほぼ1年がかりの染料づくりの後にも、藍の様子をうかがいながら染料が入った藍がめを毎日かき混ぜなければ、きれいな藍色を生み出すことはできません。「非効率的で生産性も低い藍染めですが、なぜそこまでしてやるのかといわれると自己満足なの」とあだちさんは笑いながら話します。「藍が1番きれいに見えるのはお日さまのもと。ただ、藍は紫外線を吸収するので、自分の身をすり減らして、その下の人の肌を守ってくれます。そこが藍のはかなさなんです」と、あだちさんの藍を語る言葉には、40年続けてこられた藍染めへの感謝や愛情が詰まっています。

あだちさんはかつて生死をさまよう病気を患ったそうです。手術をするとき、この世に未練はないかと思いを巡らせ「藍染めをやっていない。そのためにも生きようと思いました」といいまします。そして病気から回復し、手術前に誓った藍染めを始めました。あだちさんの藍染めは独学だったからこそ、自由な発想ができたといえます。

そんな中で生まれたのが藍の生葉染め。藍はもとも発酵しなければ染められないものと考えられていました。独学だからこそ、あれはできない、これはしてはいけないという考えがなく、藍の生の葉を使って染める生葉染めが生まれました。

あだちさんは「由布岳は藍で表現すべき対象」として繰り返し由布岳をモチーフに作品を作られています。型染めでぴしりとシャープな線で表現された由布岳は、ぜひたくにも「藍の生葉染め」と「藍の発酵染め」を掛け合わせたもの。天気や時間、その時々で姿を変える由布岳と藍染めが絶妙なたちで融合しています。

あだちさんに今後やりたいことを尋ねると「今を続けること。その時その時でやることをやる」と道が開けてきました。藍は、天気や発酵の具合、作り手の気持ちなどで色味が変わるので、その時その時が真剣勝負です」と話してくれました。昔は、藍染めの移り変わる色それぞれに名前をつけて、変化を楽しんでいたそうです。「人が同じ状態はなく移ろうように、藍も同じ色はなく、その移ろいを楽しむものです」とあだちさんは話します。こうして藍のことを知ると、はかなく移ろう藍を暮らしの中に取り入れたくなりますね。

あだちさん、ありがとうございまして！



〈伝えたい由布のもの〉について

詳細は地域おこし協力隊ページをご覧ください。



▲ 由布市地域おこし協力隊